

208



第五輯

支那事變報國美談
輝く忠誠

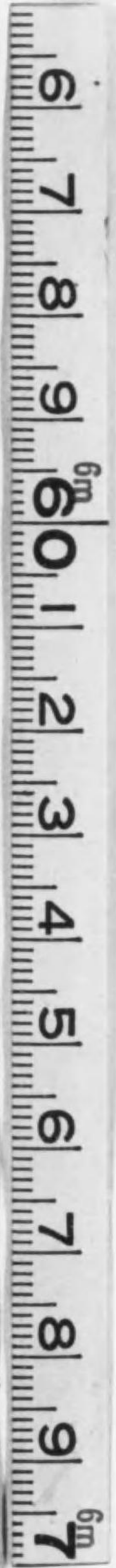
特 245

613

軍事普及部編纂



海軍協會發行



始



特 245
613

本輯は海軍省海軍軍事普及部發行の「支那事變
報國美談」(第五輯)と同じ内容のものです。

序

今次事變勃發以來、我が忠勇武烈の海軍將兵諸士が、陸戦隊に、空襲部
隊に、或はその他の任務に勇躍奮闘して、絶大の偉勳を奏しつゝある輝く
忠誠美談は、燃ゆるが如き銃後の報國美談と共に、日本精神を遺憾なく發
揮して居るが、之を不朽に傳へ、國民精神の作興に資すべく、海軍省海軍軍
事普及部では之等の美談を編纂。本協會から廣く江湖に贈ることゝなつた。
日本國民たるものは何人も一讀すべきものと思ふ。

昭和十三年七月

社団法人 海軍協會



支那事變 報國美談 輝く忠誠 (第五輯)

目次

一、上海特別陸戰隊の奮戦……………一

(イ) 決死、重要據點を死守した福永中隊長……………二

(ロ) 後方補給部隊の奮闘、池田小隊の勇戦……………五

(ハ) 銃を握り締めて射撃姿勢の儘壯烈なる戦死……………七

(ニ) 弾雨下に電話線を補修、友隊との通信連絡を確保……………一〇

(ホ) 「俺にかまはず敵機を撃て」と悲壯の一語……………一二

(ヘ) 傷つける右手を俯仰輪に縛りつけて奮戦……………一四

(ト) 敵前上陸、白樺決死隊員の血戦……………一五

手榴弾に傷ついた一水兵の手記……………一五

二、白茆口敵前上陸の蔭に咲いた海陸協同美談……………一九

日章旗を振る陸兵二名を救った駆逐艦乗員……………一九

三、噫！空戦二十三回の空の勇士……………二三

四、傷つける海の荒鷲の必死空襲……………二六

肉弾機田澤(特務少尉)機……………二六

五、南昌空襲、片翼凱旋の樫村機……………二八

一機を撃墜、一機を體當りて討取る……………二八

六、南昌の空に輝いて散つた殊勳の大林(少佐)機……………三三

七、故大林法人少佐未亡人の書簡……………三五

八、南支上空の散華……………三七

故平井兵曹の武者振、機上死の凱旋……………三七

九、國民愛國の結晶、報國號飛行機の奮戦振……………四〇

報國第一五二號(海軍協會兵庫號)の奇蹟的生還……………四〇

一〇、空の勇士未亡人の書簡と

故渡部特務少尉の遺書……………四

一一、軍國の兄

出征中の弟に父の死を秘して奮戦を祈る……………五〇

一二、次の大日本帝國を背負ふ少國民の心意氣……………五三

(イ) 「一本の釘も無駄には出来ない」……………五四

(ロ) 半島の彼方から皇軍へ感謝狀……………五七

(ハ) 雪の樺太から海軍大臣宛に感謝狀

新年の書初めを添へて……………五九

(ニ) 先生にも親にも告げず納豆賣りをして獻金……………六三

(ホ) 海、陸軍大將坊やの獻金……………六四

(ヘ) 少年少女の真心からの獻金……………六五

表紙寫眞……………上海海軍特別陸戰隊本部屋上の我が鐵壁陣

支那事變 輝く忠誠 (第五輯)
報國美談

一、上海特別陸戰隊の奮戦

上海特別陸戰隊は、昭和十二年八月十三日、暴戾支那兵の不法射撃に對し、已むを得ず蹶然起つて之に應戦するに至り、爾來文字通り孤軍奮闘、惡戦苦闘を續け、八月二十三日以後、我が陸軍との協同作戰に依つて激戦二ヶ月餘、遂に上海の堅壘を陥れ皇軍の武威を中外に輝かしたことは周知の通りであるが、事變勃發當初の我陸戰隊兵力は二千數百名に過ぎず、而もその警備すべき租界守備線は、約十三軒の長きに及んで居り、一方敵方は中央軍約三萬、その他を合して約四萬の大兵を擁してゐたのである。

尙敵の援軍は日々激増するに反し、我方は陸軍の上陸せる八月二十三日（支那側兵力約二十萬）迄、大なる増加を見なかつたにも拘らず、天佑とはいへ、遂に克く守備線を死守したことは、以てその孤軍奮闘、惡戦苦闘の情況を物語るに十分である。この間陣中美談は枚舉に遑なく、既に「輝く忠誠」第一輯以下に掲載したものであるが、左記もその一部である。

(1) 決死、重要據點を死守した福永中隊長

海軍中尉 福 永 喜 夫

昭和十二年九月十三日午後五時二十分、福永中隊長は部下の二ヶ小隊を率ゐ、敵の第一線屈家橋森林の陣地を占據したが、敵は正面左右の三方から我に猛射を浴びせて来たので、我が一部の兵力を以て反撃を加へて之を制壓しながら、陣地構築にとりかゝつた。ところが折柄の降雨の爲、工事が困難なに加へて、土囊、鐵板等の器材も思ふ

やうに手に入らず、我方は相當苦境にあつたが、一方敵はその頃、更に迫撃砲、曲射砲等を加へて愈々攻勢に出で、機を見て我が陣地を奪回しようとする氣勢を示した。恰もこの時敵彈の爲、小隊長園畑兵曹長は重傷を負ひ、中隊先任下士官は戦死を遂げ、その他重軽傷者が續出した。



福永海軍中尉

戦況かくの如く慘澹たる光景を呈した裡にあつて、福永中隊長は泰然自若として、「この地を退かば、徒に損害を大ならしむるばかりである。この地を確保することに依つて、爾後の戦果を有利に擴大することが出来るのだ。本隊は飽く迄この地を死守する。最後の一人となる迄奮戦し、最後の一人は決して中隊長の死體を收容するな、唯圖囊だけは持つて歸れ、兵器は残らずクリークに投じて敵に一挺の小銃も渡すな」と決然言ひ放つた。この言々句句肺腑をつく命令に、全員悉く死を決し、或は應戦に、或は陣地構築

工事に、必死の奮闘努力を續けた。そして翌十四日午前一時十五分、遂に陣地構築を完了した。

この間福永中隊長は、大隊長から贈られた一本の清酒も、自らは一滴も口にしない部下に與へ、配給された夕食も深夜迄一粒も喰はずに工事に疲れた部下に與へ、終夜毅然として陣頭に立ち盡し、之から小隊長以下隊員の仇を討ち、味方砲隊を掩護するぞ、今夜陣地を堅固にして置けば拂曉戦は勝算歴々、易々たるものだ」と終始全員の士氣を鼓舞することに努めた。

かくて陣地を奪回せんとする敵の企圖を挫き、友軍の進撃成功の一大誘因を作つた。一人の勇者は百人の勇者を作るとは、正に福永中隊長に於て之を見るといへよう。

海軍中尉 福永喜夫略歴

原籍 山口縣玖珂郡小瀬村二七七七

生年月日 大正元年八月七日

入校 昭和四年四月一日 兵學校生徒
現官任用 昭和十年十一月十五日 任海軍中尉

(口) 後方補給部隊の奮闘、池田小隊の勇戦

小隊長 海軍兵曹長 池田忠太郎(横鎮)

池田兵曹長は事變當初から戦闘に参加し、殊に最も危険且至難なる任務を帯びる後方補給隊に在つて、克く大隊長を補佐して顯著なる功績を挙げたが、就中八月十六日廣中路の激戦の時は、敵兵約一萬の總攻撃に對して、我は寡兵を以て前線を死守したので、彼我激戦數合、早くも味方前線から彈藥不足の報が來た。池田兵曹長は部下を激勵して必死の補給を續けたが、敵彈は雨霞と飛來して部下補給員は相次いで斃れ、もはや残員は僅少となつた。而も前線の彈藥は益々缺乏し、危機は漸く眼前に迫つた。池田兵曹長は憤然として残員に訓示して曰く、「只今より決死強行補給を決行する。」

第一線の彈藥の有無は戰の勝敗を決する重大事である。各員死を決して急速補給、この危機を救へ」と、かくて或はトラックに依り、或は駆足に依り、殘員一同彈雨の中に飛出した。だが殘員と云つても相次いでバタバタ倒れ、遂に七名を殘すのみとなつた。しかしこの決死の働きに依つて、忽ち第一線の危急を救ふことが出来、頑敵一萬餘を撃退し、見事前線を死守することに成功したのであつた。

翌十七日池田兵曹長は、虹口公園北側地域の掃蕩を命ぜられ、勇躍任に赴いたが、この時既に十數名の敵が侵入してゐたので、忽ち之を包圍殲滅、次いで家屋に占據してクリーク對岸の敵と對峙、交戦を續けた。敵は日毎夜毎執拗に逆襲を試みたが、その都度彼に痛撃を與へて之を撃攘した。

池田小隊のかくの如き神速機敏なる掃蕩がなかつたら、遂には敵大部隊が虹口公園に侵入し、我が陣地は危険に陥つたに相違なかつたのである。

右十六、十七、兩日に互る池田兵曹長以下の奮戦は、爾後の作戦に寄與すること甚

大なるものがあつたと謂はねばならぬ。

海軍兵曹長 池田 忠太郎 略歴

原籍	山形縣飽海郡本楯村大字大豐田字上星川三十一番地
現住所	同
生年月日	明治三十七年三月十五日
入團	大正十年六月一日 吳海兵團
入校	大正十一年十一月十一日 普通科砲術練習生
	大正十三年五月五日 高等科砲術練習生
現官任用	昭和十一年十一月一日

(ハ) 銃を握り締めて射撃姿勢の儘壯烈なる戦死

海軍二等水兵 酒井 藤好(佐鎮)

酒井二等水兵は平素から模範兵として小隊長や班長から可愛がられ、同僚からも敬

愛されてゐた。昭和十二年八月九日、大山中隊長が支那保安隊の爲射殺さるゝや、酒井二水は弔合戦の出来る日の一日も速かに來らんことを祈つてゐたが、八月十三日遂にその日は到來した。當日酒井二水は水月派遣隊に派遣されてゐたが、呼戻されて勇躍第一戦に出陣し、十三、十四、十五の三日間一睡もせず、彈雨を冒して彈藥、糧食等を運搬配給したり、或は選ばれて斥候、傳令等に派遣せられたりして、息繼ぐ隙もなく元氣に活躍を續けてゐた。

翌十六日午前十時頃のことであつた。酒井二水は水電路と廣中路との交叉點附近で敵の猛射を浴び、腹部に貫通銃創を受けたが、之に屈せず尙も銃を執つて反撃を續けてゐた。しかし重傷を負うた酒井二水は、出血がひどいので體力が次第に衰へ、喉の渴きに堪へかねて、傍で射撃中の某一水に敬禮をし、「誠に済みませんが水を少し下さい」と乞うて、その水兵の水筒から僅かばかりの水を飲んで、再び射撃の姿勢をとつたが、もはや開鎖挺を引く力もなく、折柄突撃に移らうとする傍の戦友に「残念！」と唯

八

一言を残し、銃を強く握り締めて射撃姿勢の儘、悲壯なる戦死を遂げたものであつた。之より先、上海方面日支の風雲漸く急を告げようとした八月七日、酒井二水の實兄が態々上海迄出掛けて來て、水月派遣隊で兄弟久々の對面をした。その時實兄は、中隊先任下士官竝に班長に向つて、「弟藤好の身命は御國に捧げたものですから、弟の身體は貴方達に御任せ致します。どうか十分働かして少しでも御役に立て、下さ」と真心を面に現して依頼したのであつた。

噫、この兄にしてこの弟あり、酒井二水は出陣以來、不眠不休、終始決死の奮闘をなし、戦闘數日早くも江南の華と散つたのである。

しかし、死して尙敵に對して銃を強く握り締めた酒井二水の尊き姿は、いたく戦友達の胸を搏ち、愈々我が軍の士氣を振ひ起させたのであつた。

海軍二等水兵 酒井藤好略歴

原籍

長崎縣南高來郡加津佐町巳二八七六

現住所
生年月日
入 團
現官任用

同
大正四年四月二十八日
昭和十一年六月一日 佐世保海兵團
昭和十二年八月十六日

(二) 彈雨下に電話線を補修、友隊との通信連絡を確保

海軍一等兵曹 笠原 三右衛門(横鎮)

昭和十二年十月十四日午後八時頃、敵の壘壘寶山路竝に虬江路方面から、北四路の我が第〇大隊正面に對して迫撃砲を以て猛烈な砲撃を開始し、次いで數百の敵が我が陣地に襲來、直前三十米に肉薄して來た。

我が第〇大隊は猛然之に反撃を加へ、彼我の砲聲股々として天地に轟き渡つてゐる時、我が陸戰隊司令部と第〇大隊本部竝に虹口部間の電話線は、降り漲ぐ敵銃砲彈の爲に忽ち切斷されて、通信連絡を全く斷たれてしまつた。

この時電話隊先任下士官笠原兵曹は、命に依り部下三名を率ゐ、勇躍北四路上の補線に進發した。その頃戰鬪はいよいよ酣にして、北四路路竝にその附近一帯には敵の迫撃砲彈が盛に落下炸裂して居た。

笠原兵曹以下三名の者は毫も之に怯まず、冷靜沈着に行動して、直に横濱路附近で切斷箇所を發見し之を補修したところ、尙不通なので、更に彈雨を冒して第〇大隊本部の方へ進んだ。時に午後八時半頃で、砲煙天を覆ひ咫尺を辨ぜざる闇であつたが、笠原兵曹は率先砲煙彈雨の中に躍込み、部下を督勵して忽ち數箇所の斷線位置を發見し、敏捷に補修作業を完了して、克く友隊間の通信連絡を確保し、爾後の作戰に寄與すること絶大なるものがあつた。

彈丸雨注の唯中に在つて克く冷靜沈着、與へられたる作業を完了することは、直接敵と交戦するよりも一層の難事であつて、眞の勇者を俟つて初めて成し遂げ得られるのである。

海軍一等兵曹 笠原 三右衛門 略歴

原籍 岩手縣氣仙郡赤増村百十三番戸
 生年月日 明治四十年七月二十八日
 入團 大正十三年六月一日 吳海兵團
 入校 昭和二年十一月二十日 普通科砲術練習生
 昭和五年七月二日 測的術練習生
 昭和十年十一月一日
 現官任用

(木) 「俺にかまはず敵機を撃て」と悲壯の一語

海軍二等兵曹 石田 正 夫

八月十四日午後五時十五分、驕れる支那空軍の精銳重爆撃機隊が、大舉して上海の上空に現れ、我が陸戦隊本部を目がけて彼の狂的盲爆撃を敢行した際、我が高角砲、機銃群は一齊に敵機に猛射を浴びせて之を撃攘した。



陸戦隊屋上○○の陣地

當時探照燈照射長兼見張として防空陣地にあつた石田兵曹は、第〇機銃群の弾倉が缺乏してゐるのを認めためたので、部下と共に迅速に弾倉に弾薬包を装填して之を供給してゐたが、偶々敵十五糎砲弾が第〇機銃群附近に落下炸裂し、石田兵曹は弾片の爲に腰部を打碎かれ重傷を負うた。

だが、豪氣の石田兵曹は之に屈せず、尙も弾倉を手にして装填の作業を続けようとした。しかしもはや立つことすら出来ない重傷なので、附近の者で彼を病舎に運ばうとしたが、石田兵曹は「俺は弾を填めるの

だ」と、どうしても肯かないので、已むなく應急手當を加へようとする、「俺にはかまはず敵機を撃つて呉れ」「砲臺下士！確り頼む」と、悲壯の一語を残して遂に意識を失つてしまつた。

その攻撃的精神の旺盛なる、「斃れて後已む」とは正に石田兵曹に於て之を見ると謂ふべく、全軍の士氣爲に大いに振つた。

(へ) 傷つける右手を俯仰輪に縛りつけて奮戦

海軍一等水兵 松井 堅一

前項と同じ時のこと、松井一水は機銃射手として敵機を猛射中、午後五時十八分、敵十五種砲弾が機銃群の傍に命中炸裂し、その弾片に依つて右手貫通重傷を負つた。銃長田内二等兵曹が彼に代らうとしたが、松井一水は代らうとはせず、「大丈夫だ」と叫んで射撃を続け、その間にも田内二曹は彼に應急手當を施してゐた。

ところがその時新手の敵ノースロップ三機編隊の來襲を認めた松井一水は「俯仰輪に手を縛りつけて呉れ」と叫んで、元氣益々旺盛、奮闘實に四十分間に及んだ。敵機を撃攘して、戦ひが終つた後、砲臺下士官の命に依つてやつと病室に退いた。

右手に重傷を受け機銃の操作困難なるにも拘らず、尙も手を俯仰輪に縛りつけて、最後迄涙ぐましく奮闘を續けた松井一水の行爲は、旺盛なる攻撃的精神の發露として、我が陸戦隊員の勇猛を如實に示したものであるといへる。

(ト) 敵前上陸、自禱決死隊員の血戦

手榴彈に傷ついた一水兵の手記

時は八月二十三日、薄明るい月明の江上に、時々閃火が奔ると思ふ途端、忽ち物凄の大音響！陸軍揚陸掩護の爲、我が驅逐隊が盛に敵陣地を砲撃して居るのである。敵は我軍の上陸を豫期して、河岸に沿うて散兵壕を構築し、機銃陣を敷いて待ち構

へてゐた。

我が決死の白樺隊を乗せた三隻の軍用船は昨夜午後九時半、陸軍揚陸掩護の重任を帯びて、上海から黄浦江を下江し、今將に敵陣地の真只中に横付せんとしてゐる。時に午前二時。

我が艦の近接を知つた敵は左岸の機銃陣地から猛烈な射撃を開始した。バラバラ！バラバラ！と鐵板に當つて跳返る音が無氣味に聞える。我方も最上甲板から機銃を以て直に應射、彼我の砲聲は天地に轟き、眠れる黄浦江上に一大激戦が展開された。



白樺隊の勇士

二時五分横付完了、我等は大隊長の揚陸開始の命令一下、彈雨の下一齊に河中に躍り込んだ。

岸壁を這上ると頭上には彈丸が飛散し、堤防の上には手榴彈が炸裂する。敵は我を一步も上陸させじと頑強に抵抗する。

我は大地に嚙りついても、支那兵を撃退して陣地を確保せねばならぬ。我軍上陸一步、既に壯烈なる肉弾戦が諸所に展開された。

古來難事の中の難事とされた敵前上陸を、今我が決死隊は十分に於て完了したのである。

敵は大軍、彈藥兵器に事缺かない。而もその有する兵器は歐米輸入の最新鋭を誇るもので、決して我に優るとも劣らないのである。今寡兵以て之に當る我が決死隊に、多數の犠牲者を出したことは寧ろ當然であるが、自分の曾て想像したこともない激戦であつた。

かくて我が白樺隊は頑敵をひた押しに、戦友の屍を乗り越え乗り越え、前進を續けた。敵の怯むを見ては突撃、又突撃、敵陣に躍込んだが、敵もさるもの、無数の死體を遺棄しつゝも頑強に抵抗した。自分は大隊長の下にあつたが、どうやら次第に味方の銃聲が衰へ出したやうに思はれた。

大隊長は彈丸が足りなくなつたのではなからうかと非常に心配された。そこで豫備彈藥隊長へ「豫備彈藥隊は、半數は機銃の彈丸を、残りには〇〇砲の彈丸を第一線に運べ」との傳令を自分に命ぜられた。豫備彈藥隊の所までは約五〇〇米位あつて、そこへ行くのには敵の陣地を突破せねばならなかつた。

自分は部下一名を伴つて出發した。約一〇〇米も前進したと思つた時、早くも部下は敵陣に傷ついたので、自分はその儘單身傳令に飛んだ。河岸へ出て竹矢來の蔭を走つた。中から銃火を浴びせかけて来る。早くも左手に輕傷を負つたが、遮蔽物を頼りにやつと豫備彈藥隊に着いて命令を傳達した。歸途一〇〇米位走つたと思つた時、小銃

彈と手榴彈を見舞はれた。小銃彈は幸ひ擦り傷であつたが、三ヶ所に手榴彈を受けて遂に倒れた。

「命令を傳へてからでよかつた」と思つた。そして銃砲聲を聞きながら、いつしか氣を失つて居た。

二、白茆口敵前上陸の蔭に咲いた海陸協同美談

日章旗を振る陸兵二名を救つた驅逐艦乗員

之は去る十一月十三日我が陸軍部隊が、突如揚子江を溯り、敵軍の側面白茆口に敵前上陸を決行した日のことである。

石松〇隊は先發隊として午前五時半頃、白茆口下流某地に上陸し、附近のクリーク、敵塹壕陣地等を偵察したところ、不思議にも敵影を認めなかつたので、更に奥地に前進を續けた。

ところが午前八時頃、突如前方竝に兩側から敵襲を受け、同隊は直に之に應戦したが、何分敵は大軍、忽ち包圍攻撃を受けて苦戦に陥つた。そこで石松部隊長は本部○隊の上陸が既に完了したものと判断し、之と連絡救助を求むべく、歩兵上等兵片山虎吉及歩兵一等兵木原喜代一を急派した。

兩名は白茆口江岸傳ひに友軍上陸豫想點に急行、やがて陣家菴附近に達した。この時突如敵兵二ヶ小隊が現れて猛射を浴びせかけて來た。兩名は直に江岸に伏し、日章旗を打振つて江上艦艇に急を報ずると共に、極力應戦に努めたが、素より衆寡敵せざるは當然、片山上等兵は右脚に貫通銃創を受け、而もこの時所持の彈丸も盡きてしまつた。敵は包圍の距離を漸次縮めつゝ、肉薄し來り、あはれ兩名の我が陸兵はもはや壯烈なる戦死を遂げるより外はないと見られた。

之より先我が驅逐艦○○の艦橋では、右兩名が江岸に沿うて走つて來るのを認めためたので、ズツと監視を續けてゐたが、地上に振られる日章旗と共にその場の光景が指揮

官の眼に映ずるや、直に救助隊派遣の命令が下された。

指揮官海軍中尉石井稔以下十二名決死の救援隊を載せた一隻の高速内火艇は、命令一下矢の如く江上を駛つた。救援隊員は直に陸岸に飛上り、彈丸雨飛の中を猛進し、敵前に於て見事この勇敢なる陸兵二名を救助して歸艦した。やがて孤立無援の石松○隊も救はれたことは勿論である。

この迅速、適切、勇敢なる行動は、生死を超越した軍人精神の發露であり、又海陸協同作戦の成果に一段の光彩を添へたものである。

救助隊勇士の面々は次の通りである。

第○○驅逐隊○○乗組

- | | | | |
|------|----|------|----|
| 指揮官 | 海軍 | 中尉 | 石井 |
| 救助隊員 | 海軍 | 一等水兵 | 田崎 |
| 同 | 同 | | 真鍋 |
| 同 | 同 | | 鈴木 |
| | | | 重武 |
| | | | 親義 |

救助隊員	海軍一等水兵	野崎久
同	同	下田實
同	海軍二等水兵	坂本藤
同	同	日高仲
救助隊	海軍一等水兵	森下喜
内火艇員	海軍三等水兵	松永智
同	海軍一等機關兵	栗崎勇
同	同	前田喜

海軍中尉 石井 稔略歴

原籍 佐賀市神野町五八八ノ五
 現住所 佐賀市神野平島
 生年月日 明治四十三年十二月九日
 入校 昭和四年四月一日 兵學校生徒
 現官任用 昭和十年十一月十五日 任海軍中尉

三、噫！空戦二十三回の空の勇士

海軍一等航空兵曹 伊藤恒三
 海軍二等航空兵曹 秋山大藏
 同 永利一

昭和十二年十一月四日、伊藤機は蘇州、無錫間の敵交通機關爆破の命を受け、當日上午十一時五十八分、折柄の悪天候を冒して〇〇機編隊の一機として勇躍艦を進發した。當時雲高三〇〇米、視界極めて不良であつたが、列機は克く緊密なる隊形を整へて飛行を續け、間もなく嘉定の西方約三哩の上空に達した。我を發見した敵防空陣は、俄然一齊に砲門を開いて我が機隊に猛射を浴びせて來た。この時伊藤機は不幸敵弾に燃料タンクを撃ち貫かれたものと見え、小焰を發したかと思ふと、數秒にして忽ち全機火焰に包まれて火達磨となり、爆彈を抱いた儘まっしぐらに敵陣地に突入し、三勇

士は一瞬にして壯烈無比なる戦死を遂げた。

右三勇士は昨年八月十四日附を以て第〇〇航空隊附を命ぜられ、急遽内地を出發、空路上海方面空の第一線に馳せ参じて以來、八月二十三日我が陸軍の吳淞敵前上陸掩



伊藤一等航空兵曹

護を初陣として、引續き江灣鎮、大場鎮、南翔、羅店鎮、殷行鎮、閘北及び浦東側一帯の敵陣地偵察攻撃に任じ、終始勇戦奮闘、夙に拔群の功績を認められてゐた。

九月下旬からは軍艦〇〇に乘組み、南支に在つて同方面沿岸封鎖任務に従事し、又廣東方面に於ては敵艦艇の撃沈、軍事施設、交通運輸機關等の爆破を繰返すこと數回に及び、殊に廣東海軍撃滅に貢獻すること頗る大なるものがあつた。そして十一月月上旬再び上海方面の戦闘に参加することになつたのである。

三兵曹は共に資性温厚沈着、勇猛果敢、空の勇士として最適の人物であつて、今次

事變空中戦に参加すること實に前後二十三回、眞に歴戦練達の戦士であつた。その壯烈なる最期は、空に残した赫々たる武勳と共に、永へに戦史に傳へられるであらう。

海軍一等航空兵曹 伊藤 恒 三略歴

原籍 千葉縣香取郡神里村虫幡千参百参拾壹番地

生年月日 大正五年九月二十三日

入團 昭和六年六月一日

現官任用 昭和十二年五月一日 海軍二等航空兵曹

海軍二等航空兵曹 秋 山 大 藏略歴

原籍 宮城縣登米郡米川村大字狼河原九拾壹番地ノ壹

生年月日 大正元年九月二十八日

入團 昭和七年六月一日

現官任用 昭和十一年十一月一日 海軍三等航空兵曹

海軍二等航空兵曹 永 倉 利 一略歴

原籍 栃木縣足利郡山邊村大字田中二八〇

生年月日 大正五年五月二十五日
入 團 昭和七年六月一日
現官任用 昭和十一年十一月一日 海軍三等航空兵曹

四、傷つける海の荒鷲の必死空襲

肉弾機 田澤 (特務少尉) 機

南京攻略戦の酣であつた去る十一月十一日、須田少佐指揮の海軍空襲部隊が、南京大校場の敵飛行場を爆撃した際、壮烈な戦死を遂げた田澤機の最期の状況が判明して、今更ながら全海軍の將士を深く感激せしめてゐる。

田澤航空兵曹長 (特務少尉に特進) は、須田少佐指揮下の森永大尉の一隊に属して、南京空襲に参加したのであるが、最初の爆撃を敢行した際、残念にも敵弾を受けてガソリンを噴出しつゝ、隊と共に一先づその上空を離れた。

ところが、ガソリンの噴出が次第に激しくなつて、到底無事歸還は望まれない状況を察知した田澤兵曹長は、恰もよし、まだ爆弾は残つてゐる、さらば之を以て、も一度思ふ存分爆撃を敢行して、最後は敵飛行場めがけて突入自爆し、暴戻非道の敵に目に物見せて呉れんと、再びとつて返して大校場の飛行場上空を目ざした。



田澤特務少尉

しかし敵に向首するや否や、噴出するガソリンは火を發した。敵の高射砲、高射機銃は雨霰だ。田澤機は猛然として、敵飛行場の上空に飛込んだと思はれた瞬間、右翼がくづれ落ち、機全體は猛火に包まれながら、飛行場附近の兵舎の上に突入した。勿論、落下傘などで飛出す筈はなく、田澤兵曹長始め、乗員は全部機と運命を共にしたのである。

之を見て居た僚機は、鬼神も泣くこの壯烈なる最期にいたく感動させられた。

海軍航空特務少尉 田澤留吉略歴

原籍 青森縣弘前市和徳町三十八番戸
生年月日 明治三十四年四月一日
入團 大正九年六月一日 横須賀海兵團
現官任用 昭和七年十一月一日 航空兵曹長

五、南昌空襲、片翼凱旋の樫村機

一機を撃墜、一機を體當りて討取る

昭和十二年十二月九日午後四時過、〇〇基地上空に、左翼を半分以上も切斷された單葉の小型機が唯一機飛來した。丁度地上では數時間前、南昌空襲のため大林、三原兩大尉の指揮する〇〇機を送り出し、その凱旋を今か今かと待ち侘びてゐる時であつた。



曹兵村樫は内圓、毫輝の臣大と機翼片

近づく片翼機を見ると、まがふ方なき大林隊の一機である。左翼が半分しかないにも拘らず、全然傾きもしないで見事に飛んでゐる。着陸しようとして一、二度地上に近づいたが、速力が落ちると、片翼が半分以上もないので平衡を失して危くなる。何度もやり直して、第五回目に漸く同機はスルスルと地上に降りたが、車輪が地面に觸れようとした途端、もんどり打つて顛覆した。この片翼機の勇敢沈着なる操縦者は

千田部隊海軍三等航空兵曹樫村寛一であつた。

この日、同機は友軍を掩護する一隊に加はつて、南昌攻撃に向つたが、途中突如、敵戦闘機カーチス・ホークの大編隊に遭遇して、凄烈なる空中戦を演じた。

この時、樫村機は猛然として敵の一機に飛びかゝつて、忽ち之を撃墜、機首を立て直すと見る間に、前方から迫り來つた他の一機と、アツといふ間に正面衝突、樫村機も大破して、敵機もろとも墜落して行くと見えなが、樫村兵曹は地上僅かの所で、辛くも愛機を水平に立て直した。見れば自分の愛機も左翼が三分の二位もぎとられてゐる。

しかし沈着なる樫村兵曹は、大破した愛機を勞はりつゝ、巧妙なる操縦に依つて遠路〇〇基地に辿りつき、着陸の際愛機は更に破損したが、樫村兵曹は身に微傷だも負はず、殊勳を立て、奇蹟的凱旋を爲し、全軍の士氣をいよいよ振り起たしめたのであつた。

本年一月七日、海軍大臣は樫村兵曹の勇敢沈着なる行爲に感激し、樫村機が片翼で飛行中の寫眞を引伸ばして、之に墨痕鮮かに「至大至剛、至玄至妙」と揮毫して同兵曹に贈ることとなり、同日海軍省から〇〇航空隊宛てに「貴隊海軍三等航空兵曹樫村寛一が先般南昌空爆に於て片翼を大半失ひたるまゝ、困難なる飛行を續け無事基地に歸還せる行爲は軍人精神の發露として激賞に値するものなり」との稱讃の文書に添へて發送した。かゝることは前例のないことであり、樫村兵曹の榮譽はいよいよ輝きを増したものと謂ふべきである。

海軍三等航空兵曹 樫村 寛 一 略 歴

原 籍	香川縣仲多渡郡善通寺町大字上吉田八二八
生年月日	大正二年七月五日
入 團	昭和八年五月一日
現官任用	昭和十二年十二月一日

六、南昌の空に輝いて散つた殊勳の大林（少佐）機

昨年十二月一日附を以て、江南空の戦線へ勇躍出征した大林法人大尉は、南昌空襲の初陣に於て三原元一大尉と共に、地上待機中の敵新鋭爆撃機二十數機を爆破、更に敵機二十數機と壯烈なる空中戦を演じて、忽ち敵機十六機を撃墜し、輝く殊勳を立てたが、二旬の後十二月二十二日又もや〇〇機隊を率ゐ、大型〇〇機隊を掩護して南昌空襲を決行した。

その際我が大型〇〇機隊掩護の位置にあつた大林大尉は、前方遙か我が隊の上空、高度約四千米から、我が大型〇〇機隊目がけて襲ひかゝらうとしてゐる敵の最新鋭戦闘機約二十數機を發見するや、單機群がる敵機の眞只中に突入、忽ち數機を蹴散らし、やがて僚機もこの空戦に馳せ參じて、遂に敵機合計十七機（内四機不確實）を撃墜、又もや輝かしき戦果を収めたが、この彼我入亂れての戦闘中、大林機は遂にその消息

を絶つに至り、やがて戦死と認めらるゝに至つた。

一月四日の支那新聞は「二週間前敵機が江南を襲撃した時、都昌縣上空で一機を撃墜し、省城に運ばれた敵機残骸の中の物品に大林大尉の文字を發見した」と報道し、

大林大尉が當日の空中戦に於て勇戦奮闘、敵機を蹴散らした際、武運拙く自らも亦群がる敵機の集中攻撃を受けて、壯烈なる名譽の戦死を遂げたことを裏書して居る。

大林大尉が勇躍征途に就いた日から僅に二旬、この間一隊の指揮官として敵機を討取ること數十機、

江南の空に燦として輝く武勳を樹て、驍名を馳せたが、早くも流星の如く南昌上空から消えてしまつたのである。この前途有爲の空の勇士を喪つたことは、惜みても尙餘りありと謂ふべきである。



少佐 大林

大林大尉は廣島縣の出身、廣島一中卒業、海軍兵學校第五十五期、航空術高等科學生
 教程を修了した時には、恩賜の銀時計を拜受した程の秀才であつた。出征前海軍報國
 號飛行機命名式には屢々參加して、高等飛行術の妙技を振ひ、銃後國民の血を湧かせ
 た勇士だけあつて、本年一月二日、小川清と云ふ人から次のやうな葉書が海軍省海軍
 軍事普及部に寄せられた。これまた銃後國民の涙ぐましき美談である。

拜啓

皇軍益々元氣旺盛進軍する所敵なし。誠に慶賀の至に存じます。
 就きましては去る十二月二十四日附國民新聞夕刊紙上に海空軍の至寶大林大尉の戦
 死が報道されましたが、他の朝日、東日、讀賣等の大新聞にはその記事が見當りま
 せん。羽田飛行場の命名式でよくその高等飛行に接してゐる私は氣がかりでなりま
 せん。私ばかりでなく、他にも大勢心配してゐる人が居ることゝ存じます。

御面倒ですがどうかお知らせ下さい。草々

海軍少佐 大林 法人略歴

原籍	廣島縣賀茂郡吉土實村大字土與丸七八七
生年月日	明治三十八年八月二十六日
入校	大正十三年四月七日 兵學校生徒
現官任用	昭和十二年十二月二十二日 任海軍少佐

七、故大林法人少佐未亡人の書簡

謹啓

第〇〇航空隊分隊長大林法人大尉儀過ぐる十二月二十二日南昌の空中戦闘に於て名譽
 の戦死を遂げたる旨の御通知正に拜承仕候
 あゝ思へば久しく願望の征途に上り候てより未だ二句を出でず聖戦の前途尙遠く部隊

の任務更に重きを加ふるの秋御奉公の餘りにも短かかりし事のみかへすがへすも残念に存じ候さり乍ら光輝ある我が海軍航空士官として御奉公仕り千載一遇とも申すべき今次事變に際會我が海の荒鷺の武威を存分に發揮潔く身命を皇國に捧げまつりて皇恩の萬分の一に報ゆるを得候事武人の本懐之に過ぎたるはなく且つ家門の無上の名譽として感激に不堪候故人はかねて獻身殉國は武人の本懐との堅き信念の持主にて御座候得ば其の身は南昌の花と散るとも魂魄は必ずや戦地に留まりて戦運を助け皇軍を守護せん事を信じて疑はざる所に御座候

唯この上は年老いたる母をいたはり護國の鬼と化せし我が夫を父にもつ二人の遺兒一裕、健二、僅か五歳と四歳の頑是なき子なれども夫の遺志を継ぎ再び御國の爲に盡させたく護り育てる覺悟に御座候

茲に謹みて夫大林大尉に代り既往の事衷心より厚く々々御禮申上候

一月五日

かしこ

故大林大尉妻

大林知恵子

海軍省人事局御中

大林大尉の遺族は

未亡人 知恵子(三〇)

長男 一裕(五)

次男 健二(四)

(現住所 廣島市草津南町九〇二一、萬谷方)

八、南支上空の散華

故平井兵曹の武者振、機上死の凱旋

新春匆々の一月八日午後、軍艦〇〇航空部隊の一隊は南支〇〇飛行場上空にその

雄姿を現した。

海軍二等航空兵曹平井宗二は、同隊の分隊長大串大尉機に搭乗してゐた。同機が攻撃目標たる敵飛行場南方から、高度を八〇〇米にとり、密雲を破つて將に爆撃を執行せんとした刹那、平井兵曹は突如西方（約六〇〇米、高度一、〇〇〇米）から敵戦闘機四機（何れも高翼單葉、所謂パラソル型、青色塗、翼端に青天白日の標識あり）の編隊が我に反航し来るのを發見、「分隊長！後方に戦闘機！」と大聲で報告すると共に敵機に應戦、旋回銃の火蓋をさつた。大串大尉は急速飛行場格納庫に爆弾を命中せしめ、機首を回して猛然敵の一機に突撃したが、敵は戦ひを交へず巧に遁走してしまつた。

この時残りの敵三機が、交々我に襲ひかゝつて來たので、こゝに凄烈なる空中戦が展開された。平井兵曹は旋回銃を以て必死の戦闘を續けてゐたが、不幸敵の數彈は平井兵曹の胸部に命中した。

同兵曹は之に怯まず、敵機に猛射を浴びせかけてゐたが、さすがに豪勇の平井兵曹も遂に力盡きて、機銃の上に打伏してしまつた。

この時敵機は逃走したので、大串大尉は後ろを振り返つて大聲で「大丈夫か、しつかりしろ」と激勵した。

この聲に應じて平井兵曹は「大丈夫です、分隊長」と堪へ難き苦悶の中にも聲を絞つて二度まで叫んだが、遂に意識不明となつたものゝ如く、その後分隊長が幾度か呼べど、もはや何の答もなく銃座に打伏した儘であつた。

この頃友軍の數機は上空から敵戦闘機に突撃、忽ち三機を撃墜した。大串大尉は平井兵曹の仇敵たる敵機が、焰を吐いて墜落して行く光景を見届けたので、一刻も早く歸艦して平井兵曹に手當を加へようと歸途を急いたが、日没頃歸艦した時は、既に平井兵曹は生けるが如く旋回銃を握つた儘、壯烈なる戦死を遂げてゐた。乗員一同はこのかなしき死の凱旋を迎へて悲憤の涙に咽ふと共に、平井兵曹の壯烈なる武者振りを

さして愈々感奮興起、一死報國を誓つた。

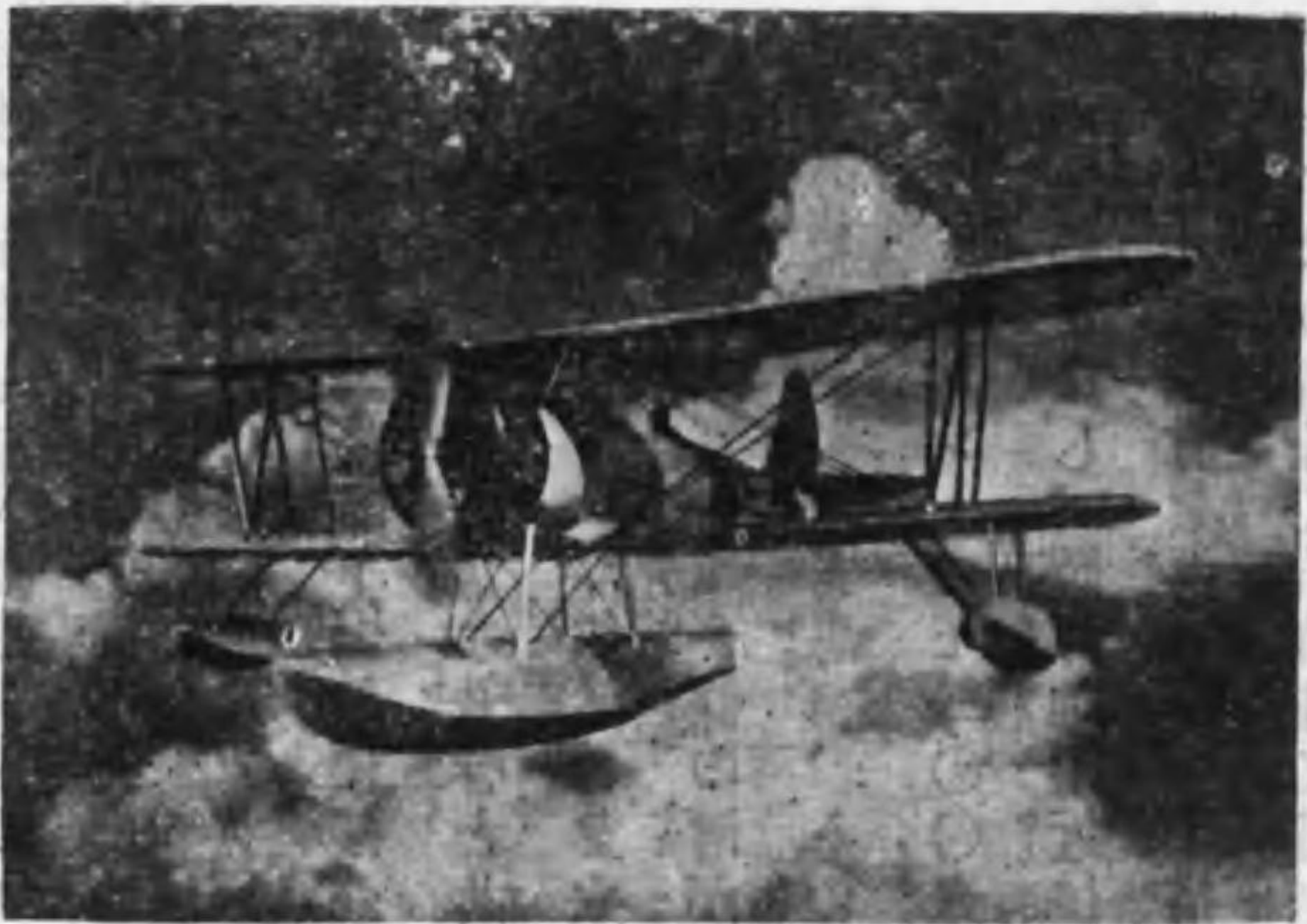
海軍二等航空兵曹 平井宗二略歴

原籍 千葉縣安房郡丸村丸本郷元石神九一ノ一
生年月日 大正五年十一月六日
入團 昭和七年六月一日 横須賀海兵團
現官任用 昭和十一年十一月一日 海軍三等航空兵曹

九、國民愛國の結晶、報國號飛行機の奮戦振

報國第一五二號（海軍協會兵庫號）の奇蹟的生還

軍艦〇〇搭載機の報國第一五二號（海軍協會兵庫號）は、昨年十一月以來、空の第一線に活躍を續けてゐるが、去る一月二十四日粵漢鐵道爆破に従事した際、多數の敵弾を蒙り、一時は絶望に瀕したが奇蹟的にも生還することが出来、その後修理を施し



報國第一五二號（海軍協會兵庫號）

た上、引續き奮闘を續けてゐると云ふ快報があつた。眞に天佑と謂ふより外はないが、又この報國號に籠れる銃後國民の赤誠の賜であつたことを信じて疑はず、左にその顛末を記して、本機獻納の人々に普く之を告げたいと思ふ。

報國第一五二號は昨年十一月末〇〇に供給せられ、本年初頭より連日敵軍事施設及交通機關の攻撃に従事し、多大の功績を擧げて居る。一月二十四日午後例の如く軍事交通機關攻撃のため、僚機と共に勇しく艦側を離れて敵地に向つた。操縦員は一等航空兵曹和田豊、偵察員は三等航空兵曹加藤幾雄である。

獲物を探しつゝ、鐵道に沿うて進む中に軍用列車を發見した。機關車は分離して停車してゐる。報國第一五二號機は先づ低空に降り、機關車に對し數回近距離射撃を加へ、蒸氣罐を貫通して著しく蒸氣を噴出せしめたが、更に徹底的に破壊する積りで一旦高度を取り、急降下爆撃に移つた。彈丸の如く唸を立て、降下し、將に爆彈を投下せんとするとき、異常な音響と共にエンジンが停止した。その儘爆彈を投下して機首を起したがエンジンには依然音を立てない。最早不時着の外はない。

その時少し離れて一條の河が目映じたので、咄嗟の判斷でこの河に不時着水して僚機の救助を得んと思ひ、その方向に機首を向けたが、エンジンが停止して居る爲、高度はグングン下つて一〇〇米となり、到底河迄達する見込がない。操縦員は遂に最後の決心をなし、敵陣地附近に突入して、潔く自爆する覺悟で、この旨を偵察員に告げると共に機首を返した——搭乗員は總て斯かる場合、不時着して浮虜の辱かしめを受けるよりも潔く自爆する覺悟を持つてゐる——後數秒で飛行機が地上に突入せんと

する時、不思議にも今迄停止して居たエンジンが急に爆音を發し、飛行機は地上すれすれに再び上昇を始めた。二人の搭乗員も飛行機も死の數秒前、奇蹟的に救はれたのである。



曹兵空航等一田和

その後もエンジンの回転は不調で、何時停止するか解らぬ状態であつたが、兎に角僚機に護られ乍ら、一〇〇哩の道を無事自艦に辿り着いた。艦内に揚收して調べて見ると、エンジンに五發、浮舟に一發の敵彈が命中し、氣筒に燃料を供給する弁の作働桿が二個屈曲して居た。之がエンジン停止の原因であつて、それが再び回転を始めたことは、全く奇蹟と云ふより外はないのである。

この幸運に恵まれた報國第一五二號は既に修理を完成し、現に支那大陸の大空に目醒ましい活躍をつとけてゐる。

海軍一等航空兵曹 和田 豊略歴

原籍 福島縣岩瀬郡長沼町大字志茂字鷄渡二十四番地
 生年月日 明治四十二年十二月五日
 入團 昭和三年六月一日
 現官任用 昭和十一年十一月一日

海軍三等航空兵曹 加藤 幾雄略歴

原籍 神奈川縣中郡北秦野村羽根四百九十四番地
 生年月日 大正四年二月二十四日
 入團 昭和七年六月一日
 現官任用 昭和十二年五月一日

一〇、空の勇士未亡人の書簡と

故渡部特務少尉の遺書

故海軍航空特務少尉渡部武治は、昨年七月出征以來、空の第一線に活躍してゐたが、十月二十六日午後一時五十分、上海陸上戦線に協力して奮戦中、名譽の戦死を遂げたものであるが、左記は事變第一年たる昭和十二年も將に暮れんとする舊臘末日、渡部特務少尉未亡人が在りし日の故人を偲び、出征前本人の遺書と共に、切々の至情を海軍大臣宛に寄せられたもので、讀むものをして感激措く能はざらしむるものがある。

(手紙の全文)

十月廿六日上海にて戦死致しました渡部航空特務少尉の妻で御座います。先には御鄭重なる御弔電に接し、過日は又あのやうに盛大な海軍葬御營み下さいまして誠に有難う御座いました。申上る言葉も御座いませませんが、私共遺族にとりましてこれ以上の感激は御座いせん。さぞかし故人も地下で感謝してゐる事と思ひます。

また偶然と申しませうか、南京陥落のあの感激の日は丁度故人の四十九日の忌日で御座いました。

首都南京陥落の日も見ずして亡くなつた夫も、どんなにかあの日を待つてゐた事でせう。

軍籍に身を投ずる者、其の職に斃るるは武人の本懐といふべく、又護國の神として靖國神社に祀られる事は軍人として最高の名譽と存じます。

いささかなりともお國の爲に盡し得たとすれば、夫もさぞかし地下で喜んでゐる事と思ひます。私も既に今日ある事は覺悟して居りましたこと、これ迄度々の演習、日夜の訓練にも幸命永らへて、此度この事變に参加致し各地の空爆にも参加させて頂き、死を以て報國の誠を竭し得ましたことは亡き夫にしましてもさぞかし満足して眠られた事と思ひますと共に、私と致しましても軍人の妻としてこの上もない名譽と存じます。

去る七月十三日出動の命を受け、非常に喜びまして、日頃の宿望叶ひ、武人としてこの上の喜びなし、誓つて一死報國の覺悟、生還は期せずと勇躍して基地に向つたので御座います。

今かうして居りましても、あの時の元氣な嬉しさうな姿が目にもちらつき、たとへ肉體は江南の地に死しても、魂だけは永遠に大空に生きてゐて故國の空を見守つてゐて呉れる事と思ひます。

遺品の中より遺書も發見せられ、今更乍ら故人の覺悟を尊く思ひました。

(遺書)

「最後に當り一言申述べて置く。

自分は帝國軍人として、陛下の御爲に斃るる事を無上の光榮とす。男子としての面目この上なし。飛行家として其の職に殉じ得る事を喜ぶと共にこれ迄御指導下さつた方々に厚く御禮申上げると同時に、死に至る迄無事御奉公出来たことを

深く感謝す。

今後は父なき子の母として益々修業を重ね、愛する子供の爲に自分の一生を捧げ、子供の教育に努力し、世の爲、國の爲になる人間に育て上げよ。

お前の両親始め一人の母上に今後共十分の孝養を盡し、兄上には一人の弟妹の將來について、無口な母上の意のある所を心靜かに十分考へて世話してくれるやう特に希望す。一人の弟竝に英一には必ず軍人として御奉公させてくれ。子供の將來に對し自分の重責を念頭に、十分身體を大切に意志強固に努力してくれ」

これが遺書の全文で御座います。

申される迄もなく、私も既にこの覺悟で居りました。幸私共には故人の志を繼がすべき二兒が御座います。

夫の血を受けついでこの子供を育て見守りつつ成長の後には必ず御國の爲に捧げる覺悟で御座います。かうして目を瞑つて居りますと、在りし日の數々の思出、元氣な

夫の姿などが頭の中をかけ巡り、はてしもない想念の中より、この子供の爲に強く生きねばならぬといふ思ひが湧然と湧き上つて參ります。只今の私の胸の中は、よくぞお國の爲に立派に死んでくれたといふ故人に對する感謝の念で一杯で御座います。

ぶしつけ乍ら感謝のあまり、一言御禮と共に故人の日本軍人としての覺悟を傳へさせて戴きます。亂筆失禮で御座いますが御許し下さいませ。

櫻花嵐に散れど日の本の國の鎮めとなりしうれしさ

十二月三十一日

海軍航空特務少尉渡部武治妻

渡部 さか 糸

米内光政閣下

海軍航空特務少尉 渡部 武治 略歴

原籍 山形縣東田川郡八榮島村大字八色木字赤沼田八番地
 現住所 千葉縣館山北條町柏崎一六九五
 生年月日 明治三十七年一月十一日
 入團 大正十年六月一日 舞鶴海兵團
 現官任用 昭和十二年十月二十六日

一一、軍國の兄

出征中の弟に父の死を秘して奮戦を祈る

皇軍將兵が出征後、父母妻子兄弟等を喪つた事も知らずに勇戦奮闘を續けてゐる
 實例は、實に枚擧に遑ない程あり、我等はかゝる不幸なる將兵の姿を想見し、又一方
 士氣を沮喪させまじと、之を秘する健氣なる家人の心根を思ふ毎に、感激の涙を禁じ

得ないのである。

此處に第三艦隊軍艦〇〇艦長から次のやうな報告があつた。

海軍二等水兵千谷清一は同艦の乗組電信員であるが、昨年十一月二十七日、高知縣
 長岡郡後免町東町の實家で實父が腦溢血で急逝した。本人の實兄廉太郎氏はこの事を
 出征中の弟に秘し、窃に同艦先任電信下士官坂本兵曹に次のやうな書を寄せて委細
 を通知した。

拜啓時下嚴寒の砌益々御勇壯にて暴支膺懲の聖戰に御奮闘の御事奉慶賀候さて愚弟
 清一儀一方ならぬ御世話様に相成居候由有難く御禮申上候先日出動の折南京攻略の
 第一線に立つとて喜び勇んだ便り有之何も知らずに待望の第一線に立つ弟に通知せ
 ずによかつたと思はず眼頭の熱くなるを覺え候實は小生等の父は去月廿七日突然腦
 溢血にて何の遺言もなく永眠仕候

「知らしてはならぬ若し弟が力を落し御奉公がおろそかになつてはと案じただ病氣とのみ通知致置き候

其の後南京も陥落致し候へども戦ひはこれが序幕との事思案にくれ居り候先達の便りにもこの連戦連捷の戦況を父に話したいと自慢らしく申して参り候

父の死を今知らしては定めし力を落し一死奉公の精神を傷つけてはとそれのみ案じ居り候小生の心中御推察被下度もはや知らしてもと思はるる時機と相成候はば何卒右の委細御傳へ願上候

甚だ感傷的な手紙を差上げ恐入り候へども弟を思ふ兄の心情御推察の上何卒御免被下度候

今後共愚弟の身上に關し御指導と御援助の程伏して奉懇願候

終りに臨み貴殿の御健康と軍艦○○御一同様の御武運長久を祈上候

十二月二十一日

清一兄

千谷廉太郎

坂本兵曹殿

一二、次の大日本帝國を背負ふ少國民の心意氣

今次事變勃發以來、戦線から櫛の齒をひくやうに傳へられて來る皇軍將兵の赫々たる武勳や、壯烈無比なる陣中美談の數々は、我が純真なる少國民の小さき胸をも搏たすには措かない。可憐なる少年少女から、或は海軍大臣宛に感謝感激の手紙が寄せられたり、或は彼等が零細なるお小遣を節約して蓄へた金を、國防獻金にと差出したることは、殆んど毎日のことで、一々枚舉に遑ない程であるが、中には次のやうな實例もあり、涙ぐましくも亦頼母しき極みである。

(イ) 「一本の釘も無駄には出来ない」

左記の手紙は東京市目黒區碑小學校四年生の五名から海軍大臣宛に、小學生として國防に協力せんとする熱誠を披瀝したものであつて、日常心懸けて金物の廢品を拾ひ集め、之を金に換へ國防獻金にしようといふのである。

この事は誰が教へたものでもなく、「一本の釘も無駄には出来ない」との父の訓から自發的に思ひついたもので、眞に舉國一致の尊い行爲であると、關係當局者を痛く感激せしめた。

(手紙の全文)

勇氣のある兵隊さんのおかげで私達は安心して毎日學校で勉強の出来るのをありがたく思つて居ります。

小さいので戰爭に出て御國につくことが出来ないで残念です。

ある日お父さんから戰爭が大きくなれば戦地にゐる兵隊さんも、内地に居る人もみな心を一つにして戦はねばならぬ。それには一本の釘もむだには出来ぬと教へて頂きました。私はまだ小學生で働くことが出来ませんが何か私の出来ることはなにかと考へました。九月になつて學校に通ふ道で私は古クギの落ちてゐるのを見つけてきました。少し氣まりが悪いと思ひましたがそれを拾ひました。それからは色々の物が目につくやうになりました。

下駄のうら金、牛乳の口金、ピン、針金等が道路畑のまはりど、どこにも落ちてゐます。

それを一つ一つ家に持つて來てためました。そしてお母さんからリンゴの箱を頂いてその中に段々とたまるのが楽しみになりました。

その内學校のお友達四人が仲間に入りました。それからは五人して毎日學校からかへつて一時間づつバタ屋部隊を作つて拾ひ歩きました。さうして十二月の二十五日

まで拾ひました。半島から来てゐる朴と言ふ屑屋さんが感心してくれてそれでは私は労働奉仕をしますと言つて高く買つてくれました。よその小父さん小母さんが何の氣なしに捨てた物だつたでせうが、これだけのお金になりました。私達はいつか土になつてしまふ物からでも、日本全国の小學生が力を合せて働いたならばきつと大砲の彈丸の一つぐらゐは出来ると思ひます。私達五人は戦争がすむまで二回三回といくらでも集めて持つて來ます。どうぞ兵隊さん世界一の日本になるやうお願ひします。

一月十五日

東京市目黒區碑小學校四年生

石川健次郎

伊東

下村和

海軍大臣様

矢野定義
段谷夏彦

(口) 半島の彼方から皇軍へ感謝狀

日本の兵隊さん

兵隊さん御元氣ですか

御地も御同様のこととお察しします。兵隊さん朝鮮さへもうこの寒さですから北支の天地はどんなに寒いことでせう。私達は兵隊さんの御力によつて安心して通學したり、家の仕事をしたり、夜は枕を高くして安眠できるのです。あの悪い悪い支那兵をうちこらし、東洋平和の爲に力の限りを盡して下さる兵隊さんに私達は心から感謝して居ます。兵隊さんの御奮闘は學校で擔任の先生や校長先生が毎日お聞かせ下さいます。

又小學生新聞などでも知ることが出来ます。

私共がこんなのにのんびりと何の心配もなく暮すことの出来るのもみんな御國の爲に戦つて下さる兵隊さんの御蔭です。幸福な私共に比べて人も氣候も變る遠い北支や上海で働いていらつしやる兵隊さんの御艱難はどんなでせう。昨日までは暑い暑い夏だと思つてゐましたのに今日はもう雪が降つて零下十度もあるさうですね。

私達が學校から歸ると火鉢のまはりによつて色々な御話をして下さいます。それを聞くと兵隊さんはどんなにか不自由な事でせう。私達は暖かい御飯をいただき柔かい床に枕を高くして寝ることの出来るのも皆兵隊さん達の爲です。どう感謝してよいか分りません。雨や雪が降るたびごとに兵隊さん達はどうして居られるのでせうか。それが私の一番の心配です。

本當に兵隊さんは北支に寒さといはず御國の爲に命を的に戦つて居られる事を思へば寒さ等は何でもありません。

小さい一年生が靴下もはかずに僕は兵隊さんになるんだ靴下なんかいるものかと、眞赤になつた足をふみつけて居るのを見ると、私もちつとして居られない氣になります。兵隊さん達の露營のことを思ふと感謝の心で一ぱいになります。

どうぞ御國の爲、東洋平和の爲一生懸命に働いて下さい。そして立派な功をたてて一日も早く凱旋なさいますやうお祈り致します。

忠南青陽公立尋常高等小學校

福 永 ト ミ コ

(ハ) 雪の樺太から海軍大臣宛に感謝狀

新年の書初めを添へて

海軍大臣様閣下に御願ひいたします。

大臣様誠に粗末な書ですが是は僕が前々から考へてゐた事を新年の書初に書いた物で

す。戦地の大将様にも送りたいと思ひましたが、さだめし御多忙で御じやまになりませうと思ひますので、同じく御多忙中とは考へましたが、お國にいらつしやいます大臣様に御送り申上げます。是がせめて日本を離れてお國のために働いて下さる兵隊さん達の御慰めになりますなら誠に是に勝る光榮は御座いませぬ。それで學校からは慰問文や慰問袋を戦地の兵隊さんに送つてゐましたが、お正月からは僕達の市から出征なさいました兵隊さんのお家の方へ差上げる事にいたしました。冬休みの時學校で先生から兵隊さんの強く忠義な譯を澤山お聞きしました。此の忠義な兵隊さんの家の中で人手の足りない家が有つたなら、冬休み中はあろか遊んでばかりゐないで何でも自分で出来る事を見付けて、お手傳ひしなければなりませんと云ふお話を聞いて、僕はちつとしてはゐられませぬ、大いに發奮するところが御座いました。大臣様今樺太はとても寒く雪も澤山で御座います。だが僕は朝早くから床を出て寒

さなんども兵隊さん達のお話を聞いてからちつとがまんして登校前には除雪に行き、又放課後には薪や石炭を運ぶ事を僕達の日課にきめて毎日喜んでお手傳ひに行つて働いてゐます。弟も妹も一緒にお手傳ひしてくれます。そしてスキーに行つたりして身體を丈夫にしてゐます。元氣な僕達少年は仲良く手を取り合つて一生懸命に勉強して立派なえらい人になつて、兵隊さん達のやうに天皇陛下の御ためお國のためにつくす覺悟で熱心にやつてゐます。僕は彼の輝かしい日章旗のもとで東洋平和のためならばと獅子奮迅の勇猛ぶりで活躍して下さる水兵さん達のお姿、而も太平洋の大海原を壓して幕進する、たのもしい僕達の海國男子、海の鎮め、今白波をけたてて世界の誇りとするお姿と、國を立つ時勝つて來ると勇んで出征されました時のお姿を何時も思ひ浮べてゐます。時々小さい妹も、私水兵さんが軍艦の上に立つて日の丸の旗をふつて麗子ちゃん萬歳とおつしやつた夢を見たお話を申して家の中で大騒ぎして、皆を喜ばしてゐます。どうか大臣様、忠臣楠公父子のお話に、人は一代名は末代とか、大臣

様の今の御身は日本で一番大事なお役に在るのだと父母から教へられました。どうか御身御大切になさいまして 天皇陛下の御ためお國のために御つくし下さいませ、そればかり御祈申上げてゐます。此の書は大臣様始め忠勇なる水兵さん達御一同様の武運長久を神様や佛様に御祈願申上げてゐます、その僕の考へを書いたのです。どうか粗末ですが此の書を御受け取り下さる事をお願ひ申上げます。では御免下さいませ。

一月二十日

樺太豊原市公立尋常小學校

- 尋五 坂本 輝雄 十三歳
 - 尋三 喜美雄 十歳
 - 尋一 麗子 八歳
- 父 坂本佐太郎方

樺太豊原市大通南十丁目

海軍大臣様

米内大臣様閣下

(註) 書初めの書には「遙に祈皇軍將兵の御健康と御戦勝を」樺太豊原市にて尋五坂本輝雄と墨痕鮮やかに認められてあり尙下方には勅題神苑朝として神社の畫が描かれてゐる。

(二) 先生にも親にも告げず納豆賣りをして獻金

瀧野川尋常高等小學校の高等科二年四組の女生徒三十八名は、先生や親兄弟にも全然告げずに、毎朝六人宛が交代で軒並に納豆を賣り歩いて、一ヶ月間に十五圓十二錢を得た。そこで初めて受持の田中光一訓導にこれを打聞けたところ、先生も初めてこの事を聞かされて、驚きもし、感激もし、遂にその生徒三十八名を引率して海軍省を訪れ、「兒童達の赤心には私も感激しました。いゝ精神教育になりました。どうか兒童達の心持を海軍將兵の方々に御傳へ下さい」と述べて、兒童の貴き勞働奉仕に依つ

て得た十五圓十二錢を海軍將兵慰問金に獻金した。

これも右と同じやうな話。

池袋尋常小學校六年一組の生徒十三名は、或る日先生から聞かされた上海戦線に於ける海軍陸戦隊將兵の奮戦振りにスツカリ感激して、「皆の力でせめて何かお菓子でも買つて贈らうではないか」と申合せて、翌日から毎朝早く起きて納豆賣りをすることになつた。そしてそれを實行して、何時の間にか金十九圓十錢の賣上金を得たので、それを持つて一日皆で海軍省を訪れ、海軍將兵慰問金に加へて下さいと差出した。

いづれも可憐なる少國民の燃ゆるが如き赤心と、何とかして自分達も御國の爲にいさゝかにても協力したいといふ純情の發露に外ならず、寔に感激に堪へない所である。

(木) 海、陸軍大將坊やの獻金

我が勇猛なる海軍陸戦隊が、上海ポケット地帯の堅壘、北停車場一帯を占據した十

月二十七日、麴町區九段白百合高等女學校生徒、小學校兒童、幼稚園兒等の各代表並に同校同窓會代表の人々が、同校校長フロランチタ・シャルパンチエ女史に引率されて海軍省を訪れた。幼稚園兒代表二人は夫々海、陸軍大將の服を着けてゐた。

同窓會代表藤本篤子さんが全部を代表して、「海軍將兵の方々の御勞苦に對しては國民として唯々感激の外はありません。私達がかうして安心して勉強出來すのも皇軍のお蔭です。私達は銃後の護りの爲に一生懸命勉強して御奉公致したいと存じます。之は私達が種々節約して得たお金です。僅かですが、海軍將兵の方々に何かおいしい物でもさし上げて下さい」と千八百九十二圓を海軍將兵慰問金にと獻金した。

(へ) 少年少女の眞心からの獻金

大分縣西國東郡三重尋常高等小學校内本城武雄よりの書狀

拜啓

酷寒の御益々御清榮に邦家の爲御盡瘁の段奉賀候と共に感謝に不堪候
 就て同封爲替壹圓七拾參錢也本校高一男猪股靜彌外十九名が昨年秋より古本を賣却
 し又は小遣錢冬休み植實を拾ひ持ち集りたる金にて海軍飛行機製作費に貢納の申出で
 有之候間甚だ些少乍ら御送附申上候何卒第二國民の赤誠御受納方御願申上候先は草々
 不備

福岡縣筑紫郡二日市尋常高等小學校少年少女團一同よりの書狀

私達學童が、朝起きて直ぐ御飯を頂くよりも、少しでも早く起きて、運動して頂く方が
 食慾も進み、保健の上からも必要と思ひますと同時に、毎朝道路を掃き清めると言
 ふ事は、道路を愛すると共に公德心を養ふ上からも結構であらうと思ひまして、私達
 は昭和五年十月一日から町内の各道路の掃除を致して居ります處、お父さんやお母さ
 ん達が非常に喜んで下さいまして、毎日一戸宛一錢づつ私達に下さる事にお話し合ひ

下さいました。毎月私達は順番を定めて放課後各戸を訪れ一錢宛を「喜捨」と言ふ意
 味で、日切致しまして、今日迄七年五ヶ月間続けました處、相當の金が積りましたの
 で、何か意義の深い事に使用致したいと考へた末、陸海軍の費用が澤山入つて居る時
 でありますので、その中でも繰り入れて戴いたらと満場一致話しが纏りましたので
 獻金致す事に致しました。別封のお金は甚だ些少でありますが、私達の心持をお察し
 下さいまして、戦費の一部にお役立て下さいませす様お願い致します。

(金五拾圓添付)

(終)

終



海軍協會徽章

定價金

分卷
5
4